

2021. 4. 1

白村江の戦いと阿曇比羅夫

川崎克之

毎年9月27日に穂高神社で開催されるお船祭りは、古代に日本・百済の連合軍と、唐・新羅の連合軍とが朝鮮半島の白村江で戦った海戦を再現したもので、旧暦の8月27日に戦死した日本水軍の大將阿曇比羅夫の鎮魂の祭りだと、いつの頃からか言われるようになった。しかし、江戸時代には旧暦の7月27日に催行されており、鎮魂の祭りとするには無理がある。また、昔から阿曇比羅夫の鎮魂の祭りとしてお船祭りが行われてきた訳ではなく、昔を知る地元の方によれば、この祭りは五穀豊穰と子孫繁栄を願って男女の行為を表したものだという。「合戦」ではなく「合体」というのが相応しいのだと。

安曇野に安曇族が入植したかどうかは別問題として、穂高神社に立像が建立され若宮に祀られている阿曇比羅夫は、碑文通りに白村江で戦死したのだろうか、また、白村江の海戦とは何だったのだろうか。日本書紀を中心にして検証してみたい。

白村江の戦い

当時、朝鮮半島では高句麗・百済・新羅の三国が覇権を争っていた。655年高句麗と百済は連合して新羅に侵攻、新羅は唐に救援をもとめた。660年唐は百済の都扶余を落とし、義慈王は降伏して百済は滅亡する。しかし、旧將福信など遺臣たちは百済復興に立ち上がり、倭国に滞在していた百済王子豊璋の送還と援軍の派遣を要請してきた。倭国は豊璋を百済王に即け三次にわたって救援軍を派遣するが、663年朝鮮半島西岸の白村江で唐の水軍との海戦で大敗して朝鮮半島から撤退した。

この敗戦によって倭国に危機感が高まり、律令国家の建設が加速し、また、倭国から「日本」へと国号を変えたとされる。

戦いの様相

白村江の戦いについて日本書紀の天智称制2年(663年)8月条には概ね次のように記されている。

8月27日 日本の最初に到着した水軍と唐の水軍とが合戦となった。日本は負けて退却した。

8月28日 日本の諸將と百済王は氣象を觀ずに、先に戦争を仕掛ければ、敵は自ずと退却するだろうと、隊伍が乱れたままの中軍の兵卒を率いて進み、陣を堅くして守る唐軍を攻めた。唐は左右から日本の船を挟み囲んで戦った。たちまち日本軍は敗れた。水に落ちて溺れ死ぬ者が多かった。船の舳先も旋回することができなかった。朴市田来津(エチノタクツ)は天を仰いで決死を誓い、齒を食いしばって憤り、数十人を殺して戦死した。この時、百済

王豊璋は数人と船に乗って高麗に逃げ去った。

このように日本書紀には、朴市田来津（エチノタクツ）という武将が壮絶な戦死を遂げたことは記述されているが、阿曇連比羅夫が白村江で戦死したという記事はない。もちろん旧唐書や三国史記など海外資料にも記されていない。

それでは、なぜ阿曇比羅夫は戦死したことになっているのか。白村江の海戦に至るまでの三次にわたる百濟救援軍と3度も重複する王子豊璋の送還記事について整理してみよう。

百濟救援軍と豊璋の送還

660年7月唐の侵攻によって百濟が滅亡し百濟の王族がすべて唐に連行されてしまったため、遺臣の福信は当時人質として日本にいた百濟王子豊璋を復興運動の盟主とすべく送還するよう要請してきた。

660年10月条には「世子豊璋及び妻子と叔父忠勝等を送る」としながら、「正しい発遣の時は七年（661）に見える」と訂正している。さらに「或本云」として、「豊璋を立てて王となし、礼を以て発遣す」とある。日本側同行者の記載はなく、福信の要請に取り急ぎ応えた形になっている。日本書紀に現れた最初の送還記事だ。

661年8月条には、前將軍大花下阿曇比羅夫連・小花下河辺百枝臣ら、後將軍大花下阿倍引田比羅夫臣・大山上物部連熊・大山上守君大石らを遣わして百濟を救い、武器・食糧を送ったとし、続けて「別に大山下狭井連檳榔・小山下秦造田来津を遣わし、百濟を守った」とある。

このとき救援物資を運んだ船団に乗っていた河辺百枝臣や守君大石の將軍らが戦後も活躍しており、帰還したと考えられる。

661年9月、秦造田来津（朴市田来津）ら第1次派遣軍が兵5000余をもって豊璋を護送している。2度目の送還記事だ。將軍名が前年8月と重複する。この部隊は豊璋を護って州柔城（ツヌサシ）・避城（ヘサシ）と転戦し白村江の戦いまで行動を共にしており、朴市田来津は白村江で戦死する。

662年5月、大將軍大錦中阿曇比羅夫連らが水軍170艘を率いて、豊璋らを百濟国に送り即位させた。3度目の送還記事だ。派遣された將軍は比羅夫のみ。

663年3月、前將軍上毛野君稚子らに率いられた第2次派遣軍の27000人が新羅に侵攻して翌月二つの城を落とす。

663年8月 新羅が州柔城を包囲し、唐水軍170艘が白村江に陣を構えているところに、27日慮原君臣に率いられた第3次派遣軍10000人余が到着した順に唐の水軍と戦うが、苦戦して退却。翌28日には前述したような状況で唐軍に大敗する。

三度の送還記事・異なる解釈

3度にわたる豊璋の送還記事について様々な説があるが、共通するのは最初の送還記事（660年10月条）が何故か全く無視されていることだ。「旧唐書東夷伝百濟」には、「僧道

琛と旧将福信は衆を率いて周留城に拠って叛き、倭国に遣使して故王子扶余豊を迎え王とした。勢いづいた百済は唐将劉仁願を百済府城に包囲したが、唐からの救援軍と新羅軍が合流して攻められると、福信らは囲みを解いて任存城に退いた。それは龍朔元年（661）3月のことだった」とある。これによれば、豊璋は既に661年3月には百済にいたことになり、最初の660年10月の送還記事のみが正しいことになる。旧唐書の記述を採用すれば豊璋の送還に関わる記事の混乱は解消するのだ。

旧唐書の記事を無視した結果、同じ日本書紀に基づいていながら2度目・3度目の豊璋送還について異説が生まれてしまう。

遠山美都男（白村江・講談社現代新書）によれば、661年8月条は「救援軍全体の編成とそれを統括する将軍の任命」で、9月条は「豊璋の百済王冊封に続いて行われた朴市田来津ら豊璋親衛軍の編成と任命」であり、実際の渡海は翌662年5月のこととし、この時に豊璋は5000人の護衛軍を中心にした第一次百済救援軍と武器・食料を艦載した170艘の船団とともに送還されたというのだ。これによれば662年5月のみが正しく、比羅夫の渡海はこの時の1回のみとなる。

森公章（「白村江」以後・講談社選書）によれば、662年5月条は「阿曇比羅夫の名前しか登場しておらず、阿曇氏の家記を材料としたもので、大將軍という肩書きも後になって律令条文の知識で潤色したもの」とし、662年5月の渡海には否定的だ。百済救援軍の渡海は既に661年8月と9月に行われ、そのうち比羅夫が参加した8月については救援物資を届けて帰還したとし、豊璋送還は9月が正しいとする。

倉本一宏（白村江史上最大の「敗戦」）によれば、661年8月と9月の派遣を第一次派遣とし、救援物資を送り豊璋らを護衛送することが目的で、一部の部隊はそのまま残り、第2次・3次の救援軍と合流したとしている。翌年5月には比羅夫による即位式の挙行とする。

以上のように、比羅夫が渡海したとされる662年5月について①前年に編成された第1次派遣軍の渡海。②渡海そのものがなかった。③豊璋の即位式挙行が目的の渡海、など、いずれの解釈が史実かは判断できないが、少なくとも比羅夫が白村江の海戦に参加しておらず、ましてや戦死してはいない可能性が濃厚になってきた。

阿曇比羅夫は戦死していない？

森公章説では662年5月の比羅夫の渡海はなかったとするから戦死もありえないことになるので、ここでは渡海があったとして検証してみよう。

662年5月の渡海はワイド版岩波文庫「日本書紀（四）」の註にあるように、王位継承の即位儀礼の挙行と考えられる。その時の比羅夫の肩書きは「大將軍大錦中」。しかし大錦中という冠位は664年に制定されたもので、まだこの時には存在しないが、追記あるいは追贈と解釈しても、「大花下」と同等位であり昇格はしていない。一方、661年8月の救援物資輸送に後將軍として同行した阿部比羅夫は同格の「大花下」だったが戦後に「大錦上」に二階級昇格しているから阿部比羅夫は戦死した可能性はある。このように戦後の冠位か

ら見て阿曇比羅夫は生還したと考えるのが妥当だろう。

662年5月、水軍170艘を率いて渡海した比羅夫が戦死したとすれば、即位式の後、海戦までの15ヶ月間何処にいたのだろうか。式典を終えて帰還したと考えるべきだろう。

また、高齢の比羅夫をサポートすべく後継者の頼垂が同行していたと思われるが、頼垂は戦後の670年に新羅に派遣されている事実があることから戦死はしていないから、比羅夫もともに生還したと考えられる。

阿曇比羅夫は武将？

そもそも比羅夫は水軍を率いるような武将だったのだろうか。白村江以前の比羅夫にはどのような実績があるか、日本書紀で見てみよう。

皇極天皇元年（642年）1月 百済に派遣されていた比羅夫が筑紫国より馭馬に乗ってきて、百済国の弔使が筑紫に到着したと、そして百済国が大いに乱れていることを報告した。そして2月比羅夫は百済の弔使のもとに百済国の様子を探るために遣わされた。さらに2月24日 百済の王子翹岐（ぎょうき）が山背の比羅夫の家に預けられた。（翹岐＝豊璋との説があるが疑問）

いずれの記事も海戦の20年前、比羅夫の壮年時代の事績で、外交官そのものの働きであることがわかる。そして、およそ15年後の斉明天皇の時代になると阿曇頼垂が比羅夫の跡を継いで西海使となっている。さらにその10年後の天武天皇3年（672）には、阿曇稻敷が筑紫に滞在中の唐使に天智天皇の喪を告げている。比羅夫－頼垂－稲敷の血縁関係は不明だが、阿曇連が外交官を輩出している一族だとわかる。

阿曇頼垂に跡を譲って引退していた比羅夫は、百済の危機に際して再び外交の表舞台に引っ張り出されたというところか。現役時代からおよそ20年を経て既に高齢となっており、外交官としてならともかく武将としての任務は困難だと思われ、戦闘に参加すべくもないと考えられる。

661年8月に後將軍としてともに渡海した大花下阿部比羅夫には水軍を率いての数度にわたる蝦夷・肅真征討の実績があるが、阿曇比羅夫には軍事面での実績が全くないことから推測できる。

軍事面での実績が全くない阿曇比羅夫が、華麗な軍事の実績がある阿倍比羅夫と肩を並べて前將軍として救援軍の先頭に立てた理由は何だろう。百済王子翹岐を一時的に預かるなど（翹岐と豊璋とが同一人物でなかったとしても）百済王室と縁が深かったためか、それとも200年以上も昔の海人の宰としての影響力をこの時代まで保ち得ていたからなのか疑問ではある。しかし、救援軍の一義的な任務が豊璋を王位に即けることであったなら、高齢かつ武将でもない阿曇比羅夫が前將軍として救援軍の先頭に立ったことは納得できる。

阿曇氏の拠点は何処か？

阿曇山背連比羅夫の名から「山背」（河内国石川郡山背郷）に居住していたと思われる。

「山背」は蘇我倉山田石川麻呂の本拠地である河内国石川郡の中にあり、ここでも蘇我氏との繋がりが窺える。

一方で難波には安曇江があり安曇氏の氏寺と考えられる安曇寺が存在した。外交官の任務からすると難波が拠点として相応しい。

難波は仁徳天皇の時代に河内湖の洪水対策で開削された堀江によって繁栄がもたらされた。大阪湾の難波津が難波堀江によって河口湖と繋がり、河内湖に流れ込む淀川あるいは大和川を遡上して内陸の河内・大和・山背へ通じる水上交通の要地となったからだ。

当会の金井恂顧問は、「仁徳天皇時代に難波堀江を開削に協力したのが安曇氏で、その結果堀江の北側に安曇江という拠点を手に入れた」としている。その後、阿曇連浜子が住吉仲皇子による皇太子暗殺未遂事件（427年）に加担して墨刑に処されて失脚、政権中央からは遠ざかったものの安曇江は確保し続けていたものと思われる。

阿曇氏は長い雌伏期間を経て、推古天皇の時代には仏教の導入等を通じて蘇我氏に接近して復活していたことが窺い知れ、孝徳天皇時代までには安曇寺を建立するだけの力を回復していたと思われる。

当時の難波には難波宮や外国使節を迎える「館」が営まれ、蘇我氏など有力豪族の「宅」もあった。安曇江は難波津に隣接して海外及び内陸との文化・物流の拠点であり、この地が阿曇氏復権の源泉となったと考えられる。

外交官活動を可能にするのは

しかし安曇江には多数の民を養うだけのバックヤードはない。すると何処の乗組員を引き連れていったのだろうか。金井恂氏によれば「安曇氏族は古くから播磨国で勢力を張っており、その後摂津国難波まで勢力を伸ばし、その後姫路の西にまで進出している」としている。播磨から摂津にかけての航海技術に長けた部民や海人を徴用したということか。しかし、航海技術を有する海人やそのネットワークを、200年以上も昔の海人の宰だった頃の影響力をこの時代まで保ち得ていたのだろうか。また、孝徳天皇時代の阿曇連の中には東国の長となっていて不法行為をして咎められたり、播磨の水田開発を命じられたりした者がおり、必ずしも海に関係ない活動もしており、この時代の阿曇氏の一族についてさらなる検証が必要だろう。

白村江など百済で戦ったのは何処の将兵か？

百済救援軍は中央貴族に率いられた西日本を中心とした国造軍だったとされる。実際、捕虜となって戦後に帰還した兵達の出身地を日本書紀で見ると、筑紫・筑後・伊予・肥後・讃岐など、殆どが西国出身の兵たちだ。中央から派遣された將軍達が率いた兵は見当たらない。あるいは中央豪族の軍など最初から存在しなかったのか？ 百済の戦線に派遣された將軍で確実に戦死したと思われるのは、壮絶な戦死を遂げた朴市田来津のみ。生還が確認できるのは661年8月の兵器・糧食輸送のための派遣軍の河辺百枝臣や守君大石と、663

年3月に渡海した間人連大蓋。阿曇比羅夫の生還については既述したが、他の将軍たちは戦後に登場せず生死不明。

帝紀の編纂に関わった救援軍将軍の後裔

天武天皇10年3月、帝紀及び上古の諸事を記し校訂させた人物の中に、救援軍の将軍の子孫と思われる二人の名がある。その二人とは救援物資を百済に送り、豊璋を即位させた阿曇比羅夫の一族と思われる阿曇稻敷、そして第2次救援軍の上毛野君稚子の子孫と思われる上毛野君三千だ。これはただの偶然だろうか。帝紀等は記紀の原史料だとされ、日本書紀に二人の影響があったと見ても良いだろう。二人とも白村江の登場人物の孫世代に当たっているが、二人による造作、潤色はなかったのだろうか。

日本国は戦っていない？

白村江で戦ったのは九州の倭国であって日本ではなく、倭国は敗戦によって滅亡に向かい、近畿の日本国がこれにすり替わって列島を代表することになったとする説がある。所謂「九州王朝説」だ。

旧唐書には倭国伝と日本伝が併載されており、倭国はかつての邪馬台国であり、さらに遡って後漢の時代に朝貢した倭奴国であると記されている。一方日本国は、「倭国の別種」とはっきり書かれている。すると旧唐書東夷伝百済国には豊璋が援軍を請うたのは倭国だとしているから、百済に救援軍を派遣したのは倭国ということになる。となると、阿曇比羅夫や阿部比羅夫はどちらの国の将軍と言うことになるのか。

阿曇比羅夫を軸にして海戦までの流れを見てみたが、九州王朝実在説から眺めてみると、戦後処理も含めて大和王権の日本が戦ったとするには説明のつかない疑問点が幾つも見えてきた。とんでもない迷路に入り込んでいく不安もあるが、今後の課題として取り組んでいきたいと考えている。